

インターナショナル・バンキング・コーポレーション 1902-1937年

東北大学 菅原 歩

本報告の課題は、アジアにおける各国国際銀行の活動の一事例として米系国際銀行インターナショナル・バンキング・コーポレーション（以下、IBC）の中国における活動を検討することである。米銀の国際化についての代表的な概説として、C. W. Phelps, *The Foreign Expansion of American Banks*, 1927 があり、Citibank（1915年にIBCを買収した）については、H. van B. Cleveland and T. Huertas, *Citibank: 1812-1970*, 1985 が詳細な研究書としてある。また、近年 Citigroup, *Citibank: A Century in Asia*, 2002 が出版された。しかし、いずれにおいても支店活動の分析を基礎として国際銀行の活動を明らかにするような作業は行われていない。これらの他には、間宮弟彦『英國為替銀行二關スル復命書』1907年が、1904年ごろのIBC ロンドン支店についての情報を示している。

IBC については Citibank が所蔵する史料を利用することができないため、本報告では上海社会科学院が所蔵する IBC 史料を利用する。本報告では、1923年と1930年のデータを比較することによって1920年代のIBC 北京支店の活動を推定することと、中国の貿易港所在の支店である天津支店（1936年）と広東支店（1937年）のデータを北京支店のデータと比較することを主要な課題とする。上海支店の史料は得られなかった。

本報告の主な結論は以下のようなものである。IBC の活動に関するオーバerviewからは、IBC は第一次大戦期に大きく規模を拡大したものの、香港上海銀行、チャータード銀行、横浜正金銀行といった主要な国際銀行の地位に接近することは難しかったことが示された。戦間期の中国諸支店に関する実証分析からは、第一に、1920年代に北京支店が一貫して上海支店に資金を供給する役割を果たしていたことが示された。そこから、IBC の中国支店網では、上海支店が主要な利益獲得支店となっていた可能性が示された。第二に、貿易港に所在し、上海支店と類似の構造を持つと推測される天津支店の活動の分析から、同支店は、資産側に多額の貿易金融項目を持っており、そこから利益を得ていることが示された。広東支店も通常は天津支店と同様に貿易金融で利益を上げていた。以上の分析から、全体として IBC の活動は、他の先行する国際銀行と類似な構造を持つということが示された。活動の構造が類似していたからこそ、後発の不利益によって、IBC は主要な国際銀行のシェアを奪うことができなかったのではないだろうか。